



Title	学部卒業論文の先行研究の章における推敲過程：推敲内容と意識の調査を通して
Author(s)	田中, 伶弥
Citation	日本語・日本文化研究. 2023, 33, p. 158-172
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/95382
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

学部卒業論文の先行研究の章における推敲過程 —推敲内容と意識の調査を通して—

田中 伶弥

1. はじめに

アカデミック・ライティング(以下、AW)と呼ばれる学術的文章の執筆には先行研究の引用が不可欠である。単に情報を引用するだけでは不十分で、情報を自身の論文の文脈から解釈し捉えなおすことで初めて論文の中で機能し、適切な論理展開に組み込んでいくことが可能である。しかし、論文執筆初心者⁽¹⁾を含むAW初心者⁽²⁾は先行研究の引用の解釈を始めとした論理展開に問題を抱えやすいとされている。一方で、AW初心者であったとしても、自ら文章を振り返る自己推敲や教員からのフィードバック(以下、FB)などのきっかけを得て推敲を行い、論理展開を改善していくことが可能であることがわかっている。

卒業論文執筆は論文執筆初心者が行うことが多く、教員やゼミ・研究室の学生からFBを得るなど推敲が促進されうる環境で行うが、推敲の過程でどのような意識を持ちながら、具体的に推敲を行うのかに着目した研究は管見の限りない。そこで、論文執筆初心者への効果的な助言やAW教育を検討する上で、文章と意識の両面から具体的な推敲過程を把握することが必要であると考え、本稿では卒業論文とその執筆者を対象に、執筆・推敲過程でどのような意識を持ち、どのように具体的に文章に反映させていったのか明らかにする。

2. 先行研究

2.1 学術論文において引用を行う際の解釈の必要性と解釈の定義

レポート・論文などのAWと呼ばれる学術的文章の執筆では、先行研究の引用が不可欠である。引用は研究の独創性の提示(石黒, 2012: pp. 196-97)等様々な目的で行われるが、引用元の情報を自身の研究の文脈で適切に「解釈」し内容を繋げることで、その目的が達成される(向井・中村・近藤, 2017)。

学術的文章における解釈の定義は、向井・中村・近藤(2017)、小森(2021)等で言及があり、いずれも自身の研究に関わる興味・関心から引用する情報の要約等を用いて捉えなおし、論文内で説明するという要素を含む。本稿における解釈の定義は、先行研究の内容の紹介と明確に区別するため、「執筆者の着眼点から先行研究を捉えなおす行為」とする。

2.2 アカデミック・ライティング初心者の抱える論理展開に関する問題

AW初心者は学術的文章の執筆において問題を抱えやすいとされている。向井・中村・近藤(2017)では、学習者による引用を伴う意見文の作文で誤った解釈を行った例や他の内容との関連性がなく論理の飛躍が生じた例が挙げられている。また山本(2016)では、日本語が第一言語であっても論文執筆初心者の修士論文や卒業論文等では、引用文の羅列に留まり

解釈がないために研究目的との関連性が示されず、論理展開に問題が生じた例が示された。

このように、解釈の有無や誤解、自身の研究との関連性を提示できないなどの要因から先行研究の情報を自身の研究に繋げる過程において問題を抱えやすいことがわかる。そのため、特に論文の中で先行研究の検討を通して自身の研究の前提知識や意義を整える章(以下、先行研究の章)において論理展開の問題が起こりやすいと考えられる。

2.3 論文の推敲

論文執筆初心者が論理展開に問題のある論文を執筆したとしても、内容に関する推敲によって文章の改善が可能である。本稿では特に内容面、論理展開に関する推敲に着目するため、文法や表現に関する校正と区別すべく推敲の定義を「論文の既書いている箇所に行った、主に内容面に関する修正」とする。

2.3.1 自己推敲が可能な点と困難な点

推敲については、教員によるFBなどがいない自己推敲では修正可能な点と修正が困難な点があることが指摘されている。AW 初心者の自己推敲を対象とした研究(劉, 2009、山路・因, 2011)では、文章の情報の配列の部分的な修正による整合性や、加筆による情報の質の向上は可能であるものの、情報間の全体的関連性や適切な論理展開に関する自己推敲は困難であるとされている。

2.3.2 推敲を促す要因

中村(2021)は、評価の高いレポートを作成した大学初年次生が、既存の論文を読んだ経験からレポートの構成や流れに関する暗示的知識を獲得し執筆に活かしたことを指摘している。一方で、先述したように情報の全体的関連性や論理展開については自己推敲が困難な点だとされている。よってAW 初心者の中でも、自らAWの構成の知識を獲得し文章に反映できる者は多くないことがわかる。しかし、内藤・小森(2013)では、教員による文章のファイルにコメントを書き込む形式のFB(以下、コメントFB)は論理展開やAWの知識が必要な修正箇所に有効であり、修正実行率も高いことが指摘されている。また、中村(2021)は教員など他者が自身の文章を読んだ経験から客観的な文章作成に関する意識を獲得していたことを明らかにした。このように、他者からのFBによりAWに関する知識の補完や論理展開の修正、客観的な文章作成が促進される可能性がある。

しかし、論文執筆初心者の執筆過程における意識と推敲の両面を深く分析した研究は管見の限りない。論文執筆初心者にさらなる効果的な助力を行うため、FBやAWの知識をどのように意識に取り込み推敲に反映させていくのかを明らかにする必要がある。

よって本稿では、論文執筆初心者が執筆中にどのような意識を持ち、その意識が論理展開や構成等内容面に関わる推敲にどのように影響したのかを、論文執筆者へのインタビュー

及び、彼らが執筆した卒業論文の先行研究の章の分析を通して検討する。それにより、推敲を促進する要因を明らかにする。

したがって、以下の3点を研究課題として設定する。

- ①論文執筆初心者による学部卒業論文の先行研究の章において、構成や論理展開等内容に関わる部分でどのような推敲が行われているのか。
- ②先行研究の章の執筆・推敲過程で、構成や論理展開についてどのような意識を持っていたのか。
- ③②の意識が推敲にどのように影響を与えたか。

3. 調査の概要

3.1 研究対象

研究対象は、日本国内の0大学の日本語教育学ゼミに所属し、2022年度に卒業論文を執筆・提出した学生1名（以下、研究協力者A）と、その学生が教員に提出した卒業論文初稿・第2稿・最終稿の先行研究の章である⁽³⁾。初稿・第2稿にはいずれも教員から原稿へのコメントFBがあり、またゼミでの発表の機会が年度を通して4回あるため、FBを得やすく推敲が促進されやすい環境である。以下に収集した先行研究の章の文章データの概要を示す。

表1 調査対象の文章データの概要

	初稿	第2稿	最終稿
教員への提出時期	2022年6月末	2022年11月末	2023年1月末
データ収集時期	2022年8月中旬	2022年12月上旬	2023年1月末
先行研究の章の字数	5382字	3130字	3654字
先行研究の章の節の数	5	2	3
先行研究の章の項の数	4	4	4

3.2 調査方法

先述した研究目的に対応するため、本稿では、先行研究の章に対する調査として①文章の構成要素への分類、②推敲の具体的内容の特定を行い、執筆者の意識に対する調査として③インタビュー調査の3つの手順をとる。

3.2.1 構成要素への分類

推敲による論理展開や構成の流れの変化を明らかにするため、先行研究の章の構成要素についてコーディングを行った。構成要素は日本語教育学系論文の先行研究の章の典型的段階を調査した小森(2021)、資料分析型論文の引用・解釈文について調査した山本・二通(2015)を参考に作成した。コーディングは文の句点ごとに行った。ただし、同じ構成要素の

文の連続は 1 つとして扱い、また一文に 2 つ以上の構成要素が含まれる場合は読点で区切った。以下に本稿で使用した構成要素を示す。

表 2 先行研究の章の構成要素

機能	構成要素	構成要素の具体的内容
先行研究の紹介	[先行研究の存在紹介]	先行研究の存在の提示
	[先行研究の内容紹介]	先行研究の内容の提示
	[ブロック引用]	本文と独立させまとまりで示す引用
	[語の定義]	研究に必要な語の定義
タイトル	[タイトル]	章の中の節や項のタイトル
言語標識	[行動予告文]	節の中での行動の流れの説明の提示
先行研究に対する執筆者の着眼点	[先行研究に対する解釈]	執筆者の着眼点で先行研究を捉えなおす行為
	[先行研究に対する評価]	先行研究の特徴をどのように捉えるかの提示
	[先行研究の問題点の指摘]	先行研究の問題点の指摘を行う内容
	[分野内での不足点の指摘]	分野内で先行研究が未着手の点の指摘
研究内容	[研究目的の提示]	執筆者自身の研究目的の提示
	[研究の意義の提示]	執筆者自身の研究の意義の提示

3.2.2 推敲の具体的内容の特定

どのような推敲が行われているのか明らかにするために、推敲の具体的内容のコーディングと、推敲箇所への修正方法のコーディングを行った。推敲の具体的内容については、言語標識や引用した情報等推敲された内容ごとに【推敲コード】を付し、コードごとに下線を引き分類を行った。

表 3 推敲内容の詳細(劉, 2009、蔡 2023 を参考に作成)

【推敲コード】	推敲コードの詳細	記号
【表面的推敲】	表現や文法などの調整	<u>下線</u>
【言語標識と情報配列の調整】	言語標識、情報の配列や段落の調整等の推敲	<u>波線</u>
【引用の内容の調整】	引用した情報の調整	<u>二重線</u>
【研究の内容の調整】	執筆者の研究内容の情報の調整	<u>破線</u>

なお、本稿では【言語標識と情報配列の調整】、【引用の内容の調整】、【研究の内容の調整】といった論理展開等内容的な推敲に着目するため、【表面的推敲】は扱わない。

またどのように修正を行ったのか把握すべく、【推敲コード】を付した箇所に具体的な修

正方法を表す記号(表 4)を付した(劉, 2009 より作成)。推敲箇所は<>で囲み、ゴシック体で表記した。以下が記号を付した例である。

表 4 修正方法を示す記号

記号	操作	記号	操作
→	書き換え	↑、↓	順序変更
+	情報の加筆	⇔	段落の 分割/結合
-	情報の削除		

例 1

<↑<新たな見解を示した>[先行研究A]では、<↓これまでの[語 A]についての先行研究を網羅的にまとめ<+た上で>、<+実際に 2 人での対話や留守番電話の録音など会話の種類ごとに[語 A]を分析している>対話における[語A]の役割<を→については>、話し手と聞き手のやり取りによって生じる[語A]、話し手の発話から言及できる[語A]の役割に分けて考察していく<る→た>

以上のように記号を付して推敲の具体的内容と修正方法を明示し、推敲コードごとによどのような修正によって論理展開が改善されていくのか、分析を行う。

3.2.3 インタビュー調査

執筆・推敲過程で持っていた意識がどのようなものかを明らかにするために、卒業論文提出後の 2023 年 4 月、研究協力者 A に半構造化インタビューを行った。主な質問内容は AW 科目の受講経験や執筆過程で受けた FB、その過程の意識、研究協力者 A の推敲内容である。Web 会議サービス zoom を用いて、実際の研究協力者 A の執筆した先行研究の章を画面共有にて表示しながら質問した。実施時間は 48 分 29 秒であった。

音声データは中村(2021)を参考に「うえの式質的分析法(上野, 2018)」を用いて分析を行った。手順は、①インタビューの録音を聞きながら情報をカード(情報ユニット)化、②似ている情報ごとに情報ユニットのグルーピング、③各グループの共通点を言語化しメタ情報(コード)作成、④メタ情報の関連性を考慮しチャート化、⑤チャートの論理関係を追いながら研究協力者のケースレポートを作成するというものである。

以上から、執筆者がどのような意識を執筆・推敲過程で持っていたのか明らかにする。

4. 推敲内容に関する結果と分析

どのような推敲が行われているのか、具体的内容について調査する(研究課題①)。

4.1 初稿から第 2 稿への構成要素の変化

以下の表 5 に、初稿から第 2 稿への先行研究の章の構成要素の変化と章の全体像、先行研究の章内部での機能を、表 2 の分類を用いて示した。構成要素には[]を付し、推敲箇所は<>で括りゴシック体で示した。構成要素の増減があった箇所には表 4 の修正方法を示す

記号を付し、構成要素の変化はないが推敲があった箇所には修正方法名を()内に示した。推敲コードには表3の下線を付した。表中の3.1等の数字は執筆本人が付した先行研究の章(3章)の節・項の番号である。

表5 研究協力者Aの初稿から第2稿にかけての構成要素と章の全体像

機能	初稿の構成要素	第2稿の構成要素
研究の背景	3.1[タイトル] [先行研究の存在紹介][先行研究の内容紹介][先行研究に対する解釈]	<—初稿 3.1>
研究に重要な語の定義	3.2[タイトル] [先行研究の存在紹介][行動予告文] 3.2.1[タイトル] [先行研究の存在紹介][行動予告文][ブロック引用][行動予告文][ブロック引用][先行研究に対する解釈] 3.2.2[タイトル] [先行研究に対する解釈][語の定義][先行研究に対する解釈]	3.1<初稿[タイトル]→第2稿[タイトル]> [先行研究の存在紹介][行動予告文(順序変更、加筆)] 3.1.1<Ⅱ初稿 3.2.2[タイトル] [先行研究に対する解釈][語の定義][先行研究に対する解釈]> 3.1.2<Ⅱ初稿 3.2.1[タイトル] [先行研究の存在紹介][行動予告文][ブロック引用][行動予告文][ブロック引用][先行研究に対する解釈]>
関連する先行研究の紹介	3.3[タイトル] 3.3.1[タイトル] [先行研究の内容紹介][ブロック引用][先行研究の内容紹介][先行研究の問題点の指摘] 3.3.2[タイトル] [先行研究の内容紹介][行動予告文][ブロック引用][先行研究の内容紹介][先行研究の問題点の指摘][先行研究の内容紹介][先行研究の問題点の指摘]	3.2[タイトル] <+行動予告文> 3.2.1[タイトル] [先行研究の内容紹介][ブロック引用]<± [先行研究の内容紹介][先行研究に対する評価][先行研究の問題点の指摘]>[先行研究の内容紹介][先行研究の問題点の指摘] 3.2.2[タイトル] [先行研究の内容紹介][行動予告文][ブロック引用]<+先行研究に対する評価>[先行研究の内容紹介][先行研究の問題点の指摘][先行研究の内容紹介][先行研究の問題点の指摘]

研究目的	[先行研究に対する解釈][研究目的の提示][研究の意義の提示]	[先行研究に対する解釈]<+ <u>[分野内での不足点の指摘]</u> ><≧ <u>[研究目的の提示]</u> >[研究の意義の提示]
研究分野の関連情報	3.4[タイトル] [先行研究の内容紹介][先行研究の内容紹介][先行研究の内容紹介][先行研究に対する解釈][行動予告文][ブロック引用]	<— <u>3.4, 3.5</u> >
	3.5[タイトル] [行動予告文][語の定義][先行研究の内容紹介][行動予告文][ブロック引用]	

表5のうち、先行研究の全体的な変化として節の数が5つから3つに減り、残った節内では項の順序変更、[行動予告文][先行研究の内容紹介][先行研究に対する評価][分野内での不足点の指摘]の加筆、段落の分割が論理展開に関わる効果的な推敲として見られた。これら推敲の具体的内容への詳細な分析を4.2以降で行う。

4.2 初稿から第2稿への内容的推敲

表5で示した推敲内容のうち、特に論理展開について効果的な推敲が行われたと考えられる箇所について、推敲コードごとに分析を行う。初稿から第2稿への推敲では【研究の内容の調整】は行われなかったため、【言語標識と情報配列の調整】【引用の内容の調整】について、具体的にどのような推敲が行われたのか分析する。

4.2.1 【言語標識と情報配列の調整】

【言語標識と情報配列の調整】では、順序変更、段落の分割、[行動予告文]の加筆について取り上げる。

第一に、順序変更が表5の第2稿3.1節内で見られた。この3.1節全体としては研究に重要な語Cの定義を行っていたが、初稿では語Cの情報が前方に、関連情報である語Dの説明が後方に置かれていたため、結論としてどちらのトピックが重要であるのか不明瞭であった。だが、第2稿では節の入れ替えによって関連する語Dの情報を踏まえて語Cの定義について読むことが可能になり、読み手が語Cに関する内容を理解しやすくなった。

第二に、段落の分割について述べる。先行研究の検討を行う第2稿3.2.2で見られ、先行研究の情報(例2の1段落目)と自身の研究の情報(例2の2段落目)が段落の分割によって明確に分けられたことで、読み手が執筆者の研究の着眼点を把握しやすくなった。

例2(文中の¹)は分析のために本稿で付したもの)

[先行研究 A]でも[先行研究 C]でも、各[語 C]がもつ機能の分析が行われており、[語 C]の多様性や役割の重要性が指摘されている。<1>しかしいずれもそれら[語 C]の「使い方」については焦点を当てておらず、[語 C]の適切な運用方法はまだ明らかになっていない。それゆえに、「何をもって『適切な(良い) [語 C]が行われた』とするのか」という指標が現状なく、指導者・支援者が[語 C]を行おうとするときの困難につながっているのではないかと考える。>

<+そこで><2>筆者は、<-その一つ手前の段階である>「実際の現場でどのように[語 C]が構築されていくのか」、つまり[語 C]そのものの機能というよりもそれを支援者が<それを支援者が構築していく過程→どのように構築しているのか>に<+まず>焦点を当てたい。>

第三に、[行動予告文]の加筆が自身の研究に関連する先行研究の紹介を行う第2稿3.2節タイトル直後に見られ、節内での行動を明示し、読み手が内容を理解しやすくなったと考えられる(例3)。

例3

<+この節では[語 C]を扱う論文を二つ紹介する。まず一つは[先行研究 A]、そしてもう一つは[先行研究 C]である。それぞれの論文について簡単に紹介したのち、2つの論文の課題点を指摘し、本研究における研究目的設定の妥当性について検証する。>

以上のように、【言語標識と情報配列の調整】について、読み手への明瞭な情報の提示を行うような推敲が、前提情報の前置と重要情報の後置や分割、行動予告文の加筆によって行われていることがわかる。

4.2.2 【引用の内容の調整】

【引用の内容の調整】では情報の削除、[先行研究に対する評価]の加筆、[分野内での不足点の指摘]の加筆の3点が見られた。

第一に情報の削除については、表5で示した通り、初稿3.1、3.4と3.5が削除された。これらの節は研究の背景や研究手法そのものに関する説明など、研究協力者Aの研究で重要な語Cに直接関係する内容ではないため、削除により内容の一貫性が増した。

第二に[先行研究に対する評価](例4の2)の加筆については、自身の研究に関連する先行研究の紹介である第2稿3.2(表5)で見られた。評価の後には[先行研究の問題点の指摘]が続く。このような文章構造によって、先行研究が明らかにした点と明らかになっていない点が、より詳細に研究協力者Aの着眼点から明示されたといえる。

例4 (2)は本稿で付したもの)

[先行研究 C]では<+2>観察された[語 C]について[先行研究 G]をベースに詳細に分類して

おり、その項目も「言い換え」(〔先行研究 C〕:170)、「質問返し」(同:171)、「沈黙」(同:171)など、〔先行研究 A〕と比べかなり具体的である。<+これらの分類の基、>それぞれの〔語 C〕が児童の活動にどのような影響を与えたかについて詳細に述べている<一方で、→。しかし、>なぜその種類を選択したのか、なぜ〔語 C〕が必要なタイミングだと判断したのかといった、支援者側の判断材料についての言及はなかった。

第三に〔分野内での不足点の指摘〕の加筆(例2の①)については、第2稿3.2後半部、研究目的の部分で見られた。初稿では〔先行研究の解釈〕の後に〔自身の研究目的の提示〕が記されていたが、第2稿では研究目的の提示の前に分野内での不足点を明示したことによって、先行研究と自身の研究との関連性が示され、内容の一貫性が高まった。

以上から、【引用の内容の調整】については、先行研究の情報の調整を通して、研究協力者 A 自身の研究目的に繋げるための内容の一貫性を増す推敲が行われていると言える。また、これらの推敲により、第2稿の先行研究の章では、研究において重要な語の定義や加筆された先行研究の検討、問題点の明確な指摘を通して自身の研究目的を導出する過程が示された。これは、小森(2021)が示した日本語教育学系論文に典型的な段階と一致しており、研究協力者 A が AW の構成に関する知識を執筆過程で獲得していったことがわかる。

4.3 第2稿から最終稿への構成要素の変化

第2稿から最終稿にかけての推敲による、構成要素の変化と章の全体像を示す。表5と同様に構成要素の変化を記号で示し、構成要素に変化がない場合はその箇所での修正方法を()内に記述した。

表6 研究協力者 A の第2稿から最終稿にかけての構成要素と章の全体像

機能	第2稿の構成要素	最終稿の構成要素
研究に重要な語の定義	3.1[タイトル] [先行研究の存在紹介][行動予告文]	3.1[タイトル] [先行研究の存在紹介][行動予告文]
	3.1.1[タイトル] [先行研究に対する解釈][語の定義][先行研究に対する解釈]	3.1.1[タイトル] [先行研究に対する解釈][語の定義]<± ±[先行研究の内容紹介]>[解釈]
	3.1.2[タイトル] [先行研究の存在紹介][行動予告文][ブロック引用][行動予告文][ブロック引用][解釈]	3.1.2[タイトル] [先行研究の存在紹介][行動予告文][ブロック引用]<[行動予告文(加筆)]><[ブロック引用(書き換え)]>[先行研究に対する解釈]

関連する先行研究の紹介	3. 2[タイトル] [行動予告文]	3. 2[タイトル] [行動予告文]
	3. 2. 1[タイトル] [先行研究の内容紹介][ブロック引用][先行研究の内容紹介][先行研究に対する評価][先行研究の問題点の指摘][先行研究の内容紹介][先行研究の問題点の指摘]	3. 2. 1< <u>[タイトル(書き換え)]</u> > [先行研究の内容紹介][ブロック引用][先行研究の内容紹介][先行研究に対する評価][先行研究の問題点の指摘][先行研究の内容紹介][先行研究の問題点の指摘]
	3. 2. 2[タイトル] [先行研究の内容紹介][行動予告文][ブロック引用][先行研究に対する評価][先行研究の内容紹介][先行研究の問題点の指摘][先行研究の内容紹介][先行研究の問題点の指摘]	3. 2. 2< <u>[タイトル(書き換え)]</u> > [先行研究の内容紹介][行動予告文][ブロック引用][先行研究に対する評価][先行研究の内容紹介][先行研究の問題点の指摘][先行研究の内容紹介][先行研究の問題点の指摘]
研究目的の提示	[先行研究に対する解釈][分野内での不足点の指摘][研究目的の提示][研究の意義の提示]	[先行研究に対する解釈]< <u>[分野内での不足点の指摘(削除、書き換え)]</u> ><…[研究目的の提示]><+ <u>[先行研究に対する解釈]</u> ><[研究目的の提示(書き換え)]><…[研究の意義の提示]>
研究手法の先行研究の紹介		<+3.3[タイトル] <u>[先行研究の内容紹介][先行研究の問題点の指摘][分野内での不足点の指摘]</u> >

表6に見られるように、最終稿では、節の数が2つから3つに増え、また論理展開に関わる主な推敲として、[先行研究の内容紹介]の加筆、[タイトル]の書き換え、研究目的の提示の部分での大幅な修正、研究手法の先行研究に関する節の加筆が見られた。これらの推敲について、4.4で具体的に分析する。

4.4 第2稿から最終稿への内容的推敲

第2稿から最終稿への【引用の内容の調整】と【研究の内容の調整】について述べる⁽⁴⁾。

4.4.1 【引用の内容の調整】

最終稿の【引用の内容の調整】では、[先行研究の内容紹介]の加筆、[タイトル]の書き換え、研究手法の先行研究の紹介の節の加筆が見られた。

第一に、第2稿までは出典がなかった情報に例として[先行研究の内容紹介]が加筆(例5の③)され、その例を根拠として内容の信頼性が増した。

例5 ③は本稿で付したもの)

<第二言語教育においても③+「先行研究 G」で「学習者がより熟達した者と対話しながら共同し、必要に応じて足場かけに支えられて課題等に取り組む時、自力では到達可能なレベルに到達することができる(「先行研究 G」:2)」と述べられており、> <児童・生徒が→学生が>自力で達成できる範囲の言語活動に留まらず彼らの「語 D」に<積極的にアプローチして→着目することで> <言語運用能力や認知能力そのものを→言語運用能力を> <引き上げるための→伸ばそうという> <取り組みが→研究が> <重要視されている。→行われている。>>

第二に、[タイトル]の書き換えが見られた。第2稿までは本文3.2.1と3.2.2(表7)に研究者名と年号によるタイトルが付されていたが、最終稿ではどのような研究かを示すタイトルに書き換えられ(例6: <「先行研究 A」→「語 C」の基本的な機能についての研究>)、読み手が項の内容を把握しやすくなったと言える。

最後に、研究手法の先行研究の紹介(表6の最終稿3.3)が加筆されたことで、研究に関する前提知識が整えられた。

以上から、【引用の内容の調整】において、加筆や書き換えによって研究における前提知識を整え、研究の信頼性を高めるような推敲が行われていることがわかる。

4.4.2 【研究の内容の調整】

最終稿では、初稿から書かれていた研究目的の書き換え、研究の意義の削除が見られた(表6)。初稿と第2稿では研究手法とともに、語Cについて知見を得るという研究目的や研究の意義が書かれていたが、最終稿では語Cの構造を限られた範囲ではあるが明らかにするという研究目的に書き換えられた。また、最終的な構成要素としては、[先行研究の解釈][分野内での不足点の指摘][先行研究への解釈][自身の研究目的の提示]となり、[自身の研究の意義の提示]は削除された。

5. インタビュー調査の分析結果

推敲に影響を与えた研究協力者Aの意識を明らかにするために行ったインタビューデータを、うえの式質的分析法を用いて分析した。分析の結果、一次情報の情報ユニットは94個、コードは19個取り出された。そのコードからさらに「引用の仕方や表現について」「構成についての知識獲得」「先行研究の具体的内容・研究の意義」「情報の取捨選択」「ゼミでの活動」の5つのメタ情報が抽出された。それらのメタ情報ごとに記述したケースレポート

を以下に示す。コードは太字で示し、一次情報には下線を引いた。

研究協力者 A の執筆・推敲過程での意識

1、引用の仕方や表現について

研究協力者 A は卒業論文執筆開始前後、インターネットや大学勤務の母親から AW の知識を獲得したことで、引用の信用度を落さないことを意識していた。さらに執筆中、文章のモニター能力が向上し、わかりにくさを感じた長文を分割する、自身にとって流れがわかりやすくなるため行動予告文を書く等の推敲を行った。

また、英語の先行研究の意識を避ける意識も教員からの FB を受けて生じた。

2、構成についての知識獲得

先行研究の章の執筆について授業で学んだ経験があったため、執筆中の先行研究の章のイメージを獲得しており、結果、自身の研究の意義を示す必要性の認識から語 C に関する先行研究の不明点に焦点を当てる構成を意識するようになった。

初稿に対しては、先行研究の羅列ではなく、自身の研究と関連するように先行研究を組み立てることを勧める教員からの論理展開に関する FB もあり、構成を整えた。

また、先行研究の構成に関する授業資料を見返したときに、先行研究が明らかにした点を明確にする意識が生じ、先行研究の評価を加筆した。

3、先行研究の具体的内容・研究の意義

研究対象の語 C に関して先行研究で明らかになっている点/なっていない点から自身の研究のきっかけとなった問題意識を持つようになったことから、その問題意識を自身の研究の着眼点とした。第 2 稿執筆中は、語 C の定義の検討不足に対する懸念を持っていたが、その検討不足を執筆の初期段階で指摘されることはなかったため、そのままでよいと判断した。

しかし、教員からの第 2 稿へのコメント FB で、語 C の検討不足による研究目的と研究結果のずれの指摘があり、最終稿では研究目的の書き換えの必要性が生じた。このことから、この研究目的の未達成が卒業論文執筆において解消できなかった後悔となった。

4、情報の取捨選択

初稿で挙げた先行研究を引用した理由を問う FB を指導教員より受けたことにより 初稿から第 2 稿への推敲では、情報を自身の研究との関連性の高低で分けることができた。その結果、最終的に自身の研究に繋げる構成から外れる情報は削除した。

5、ゼミでの活動

研究協力者 A は、ゼミ内の活動で AW や先行研究の章についてはあまり注目しなかった。また、教員やゼミ生からはゼミ内では先行研究の章についてあまり触れられなかった。

ケースレポートから、研究課題②の執筆者の意識について考察を行う。本ケースは、卒業論文執筆までの学習経験からなる既存の AW の知識や研究分野に対する知識を教員からの FB を通して強化し、推敲に繋げていった例である。研究協力者 A はこれまで学習した AW の知識について振り返る意識を持って推敲し、また、引用の意義を問う FB や文章の論理的構築を勧める FB を反映させ、さらなる推敲を行った。

また、研究対象の検討不足について懸念を抱いていたが、積極的に相談を行わなかったために研究目的と研究結果に齟齬が生じる結果となった。しかし、教員からの FB によって研究対象に関する知識を強化することができ、当初の研究目的は未達成ではあるが、論文自体の結果との整合性を取るため推敲を試みることができた。

さらに、自身の文章の流れ等のわかりにくさに気づき、論理展開の明確化の意識が芽生え、長文の分割や行動予告文の加筆を行うことができた。

以上から、研究協力者 A は、1) 既存の AW の知識の強化による内容の一貫性の向上、2) 研究対象への理解の深化による齟齬の解消、3) 執筆者自身に対する論理展開の明確化の意識による読み手の理解の促進の3点について推敲過程で意識化が進んだことがわかる。

6. 考察

インタビュー調査を通して明らかとなった、意識化が進んだ 1) 既存の AW の知識の強化による内容の一貫性の向上、2) 研究対象への理解の深化による齟齬の解消、3) 執筆者自身に対する論理展開の明確化の意識による読み手の理解の促進の3点について、具体的にどのように文章に反映されているのか考察する(研究課題③)。

第一に、既存の AW の知識の強化による内容の一貫性の向上について述べる。AW の知識の反映は主に引用の内容の調整に見られ、AW の授業資料を振り返りや論理展開と情報の取捨選択に関する FB によって知識を強化し、先行研究の評価の加筆、比較的関連性の低い情報の削除、分野内での不足点の指摘や研究手法の先行研究の紹介の加筆など、内容的な一貫性を高める推敲に繋がったと考えられる(本稿 4.2.2、4.4.1)。

以上から、内藤・小森(2013)の指摘する通り、既存の AW の知識に働きかけて補完するような FB によって意識化が進み、自己推敲が困難だとされる先行研究の章全体の論理展開の一貫性についても、情報の取捨選択を通して推敲を促進することが可能であるとわかる。

第二に、研究対象への理解の深化による齟齬の解消について述べる。FB によって研究目的と結果の齟齬に気づくとともに研究対象への理解が深化し、結果と整合性がとれる内容に自身の研究目的の書き換えを最終稿で行っている(本稿 4.4.2)。劉(2009)等の指摘する通り、論文全体の論理的な繋がりに関する自己推敲は難しくとも、FB による研究対象への理

解の促進と齟齬の指摘により、論理展開の調整が可能であると言える。

また、自己推敲が難しい項目として、研究の前提となる概念など論文執筆前の段階で内容的な理解と検討が必要な項目が挙げられる。研究協力者 A は研究対象である語の検討不足には懸念を抱いていたが、教員への相談などは行わず卒業論文執筆に後悔を残した。

最後に、執筆者自身に対する論理展開の明確化の意識による読み手の理解の促進について述べる。研究協力者 A は自分にとってわかりやすく文章の流れを示すため、わかりにくさを感じる部分に長文の分割や行動予告文の加筆を行い、その結果、読み手にとっても論理展開を把握しやすい文章への推敲が可能になった。初稿での段落の入れ替えや段落の分割、行動予告文の加筆(本稿 4.2.1)に、これらの明確化の意識が現れている。

また、推敲の過程で文章の流れのわかりにくさに気づいたことから、執筆を進める中で文章のわかりやすさに関するモニター能力の向上があったことが窺える。

このように、論文執筆初心者であっても教員からの FB を通して AW の構成に関する既存の知識の補完や研究の前提知識への理解が進み、自己推敲が困難である内容の一貫性や論文全体の整合性に関する意識化が促進され、その意識化が実際に推敲に反映され修正が実行されていくことが明らかになった。また、論文執筆初心者であっても執筆過程で自ら文章のわかりにくさに気づくなど、情報の配列や文章の理解しやすさへの意識が生じ、自己推敲によって情報の配列等の推敲が促進されることがわかった。

7. まとめ

以上の内容を踏まえ、論文執筆初心者による学部卒業論文の章の先行研究の章における内容面の具体的な推敲に対して、推敲過程でどのような意識が推敲の要因となったのかまとめ、それらから得られる教育的示唆を述べる。

まず、自己推敲が困難である、研究内容に対する理解と検討が必要な推敲と論文全体の内容の一貫性や整合性については、教員からの研究対象の知識を補完する FB や、既存の AW の知識を補完する FB が有効であることがわかった。FB によって内容の不整合や情報への関連性に意識を向けることが可能になり、内容の一貫性を高め全体的な整合性を高める推敲が促進されるといえる。

また、論文執筆初心者は研究に関する知識の不足から懸念を抱きやすくも、ゼミ等で相談の機会を逃してしまうことや、初稿や第 2 稿など提出時点で文章化が可能な内容を示す提出物には、未確定の内容に関する疑問が現れない可能性がある。よって、不安や懸念を言語化し FB を受ける場がゼミであることを積極的に周知する必要がある。

最後に、タイトルの書き換えによる読み手への内容の明示が可能になったことや、執筆を進める中で自らの文章の理解しにくさに気づく等文章のモニター能力が向上することも明らかになった。しかし、これらの推敲を促進した要因は本稿では不明であるため、今後の課題としたい。

【註】

- (1) 初めて卒業論文や修士論文を執筆するなど、論文執筆の経験が浅い者を指す。
- (2) レポート、研究計画書、論文等の学術的文章の執筆経験が浅い者を指す。
- (3) 本研究への協力を依頼するにあたり、研究協力者へ研究内容の説明とプライバシー保護を行う旨の説明を行い、了承を得た。
- (4) 【言語標識と情報配列の調整】も見られたが、他の推敲に付随する、論理展開に重要ではないものと考えられるため、本稿では扱わない。

<参考文献>

- 石黒圭(2012)『この1冊できちんと書ける!論文・レポートの基本』,日本実業出版社
- 上野千鶴子(2018)『情報生産者になる』,ちくま書房
- 小森万里(2021)「人文科学系論文の「先行研究の章」におけるメタディスコース」,『日本語・日本文化』,第48巻,pp.1-34,大阪大学日本語日本文化教育センター
- 蔡苗苗(2023)「留学生のオンラインによるピア・レスポンス活動がアカデミックな文章の推敲・改訂に及ぼす影響について:「研究計画書」の事例をもとに」『大阪大学言語文化学』,第32巻,pp.1-18,大阪大学言語文化学会
- 内藤真理子・小森万里(2013)「どんな手助けがあればレポートの自己修正ができるのか:マーカー機能とコメント機能を使った作文指導の実践報告」,『専門日本語教育研究』,第15巻,pp.41-46,専門日本語教育学会
- 中村かおり(2021)「レポート・ライティング成功者はいかに書いたか—取り組みへの意識と意識化のきっかけに注目して—」『専門日本語教育研究』,第23号,pp.59-66,専門日本語教育学会
- 向井留実子・中村かおり・近藤裕子(2017)「引用で求められる「解釈」をどのように指導するか—学習者の作文事例から見た引用・解釈文作成の困難点と指導のあり方—」,『専門日本語教育研究』,第19巻,pp.69-74,専門日本語教育学会
- 山路奈保子・因京子(2011)「論証の「厳密さ」に対する大学新入生の意識を向上させるには」『北海道言語文化研究』,第9巻,pp.63-74,北海道言語研究会
- 山本富美子(2016)「論文の「意図的ではない剽窃」の問題:モダリティの混同と解釈の正しい引用」,『Global Communication』,第6号,pp.117-132,
- 山本富美子・二通信子(2015)「論文の引用・解釈構造—人文・社会科学系論文指導のための基礎的研究—」,『日本語教育』,160号,pp.94-109,日本語教育学会
- 劉偉(2009)「中国人日本語学習者の説明的文章の論理展開に関する自己推敲の調査・分析」『専門日本語教育研究』,第11巻,pp.31-38,専門日本語教育学会